

令和3年度山梨県医師会優秀賞 受賞記念要旨

山梨大学小児科における腎生検症例の臨床病理学的検討
—成人例との比較—

金井 宏明

山梨大学医学部小児科 諏訪中央病院小児科

【背景】腎生検は小児においても基本的検査法として定着し、当科も山梨県唯一の小児への腎生検施行施設として積極的に実施しているが、侵襲性が高い検査であり適応について十分に考慮し適切なタイミングで実施する必要がある。しかし、疾患頻度の違いや小児特有の病態や疾患のため成人例と臨床診断や病理診断結果は異なる点も多い。

【方法】小児腎生検症例の成人例との臨床病理学的特徴の違いや類似点を明らかにするために、2011年～2020年の10年間に施行した腎生検133件中の初回101例の臨床診断と病理診断結果を、主に成人例の報告である腎臓病総合レジストリー（Japan-Renal Biopsy Registry：J-RBR）の結果と比較検討した。

【結果】患者背景は年齢中央値10.0歳（2.1–17.6歳）、男52例、女49例であった。臨床診断ではJ-RBRと同様に「慢性腎炎症候群」が最も多く85%が検尿異常で発見されていた（当科42%、J-RBR 52.5%）。「ネフローゼ症候群」も同等の頻度（当科22%、J-RBR 24.9%）だったが、「膠原病や血管炎に伴う腎障害」は、小児では

IgA血管炎の発症頻度が多く、全身性エリテマトーデスは小児では腎機能障害や尿異常のない症例でも組織評価を行うため高率の結果だった（当科34%、J-RBR 3.7%）。また、病理組織診断では、「慢性腎炎症候群」の原疾患として頻度が高い「IgA腎症」がJ-RBRと同様に最も多く同等の頻度（当科25%、J-RBR 31.0%）であり、臨床診断を反映し「ループス腎炎」（当科11%、J-RBR 2.1%）、「紫斑病性腎炎」（当科25%、J-RBR 2.4%）は高率だった。IgA腎症以外の「原発性糸球体疾患」では、「ネフローゼ症候群」の病理診断結果の小児と成人の違いを反映し、「微小糸球体変化」は当科で高率（当科57%、J-RBR 32.0%）だったが「膜性腎症」は低率だった（当科6%、J-RBR 30.2%）。

【結語】本検討により小児腎疾患の中で腎生検を必要とする症例の実態と成人例との違いが明らかになった。腎臓専門医だけでなく小児腎疾患患者を初期診療する小児科医や内科医、泌尿器科医にとって有益な情報であり広く活用されることが期待される。